

サクリファイス——目次

第一部 時代の危機を象徴するもの——論考 I

第一章 詩学管見 14

第二章 時代の危機を象徴するもの 22

第三章 還りのすがた——小林秀雄 36

第四章 非情なゼノン——吉田一穂 44

第五章 達人の剣——鶴見俊輔 54

第六章 征服と被征服——室伏志畔〈幻想史学二部作〉を読む 74

第七章 知的障害と神的暴力——佐藤幹夫〈法廷ドキュメント三部作〉を読む 86

第二部 この躓きに目覚めよ——論考 II

第一章 贈与の互酬体系——東北常民のエートス I 112

第二章	未曾有の経験——東北常民のエートスⅡ	126
第三章	詩はアメリカを欲望する——二〇〇九年展望	144
第四章	これからの世界どうなる——現代詩手帖創刊五十年祭印象記	162
第五章	敵対する他者関係をどう生きるか——フツサールとハイデガー	166
第六章	この躓きに目覚めよ——辻井喬追悼	174
第七章	未来への反復としての争闘——岩成達也のキルケゴール	178
第八章	ポスト・モダンと主体の形而上学——日本文学協会第六十六回大会印象記	182
第九章	支援と鼓舞——最もよき批評	186
第十章	風のように吹いていく出所不明の悲しみ——『土佐日記』	188
第十一章	宿命としての「イエスの物語」——アルチュール・ランボー	192
第三部	友愛というメッセージ——講演	
第一章	戦後70年からの現代詩——辻井喬の残した最後のメッセージ	196
第二章	希望は誰のためにあたえられるのか——未来からの国語教育	226
第三章	「内部生命論」と内的意識の現象学——北村透谷とフツサール	242

第四部 新しい交通路——書評 I

- 第一章 新しい交通路——吉本隆明『新・書物の解体学』 264
- 第二章 信じることへの渴望——マイケル・ギルモア・村上春樹訳『心臓を貫かれて』 268
- 第三章 廃墟を越え未来へ向おうとする意志——平出隆『ベルリンの瞬間』 272
- 第四章 非命の死者たちへの関心——吉田加南子『幸福論』 276
- 第五章 塵芥にも等しい器量——杉山平一『杉山平一詩集』『詩と生きるかたち』 282
- 第六章 普遍的な情熱への希求——阿木津英『折口信夫の女歌論』 288
- 第七章 還ってきた者の言葉——松崎健一郎『親鸞像』 296
- 第八章 捨てられた存在たちの輝き——森川達也『いのちと永遠』 300
- 第九章 まつろわぬ心をいかに御するか——城戸朱理『夷狄』^{いてき} 304
- 第十章 世界創生の言語化——夏石番矢『神々のフーガ』 310
- 第十一章 言葉を失うということの怖さ——田村雅之『鬼の耳』 312
- 第十二章 事象のなかに溶けていく恍惚——古井由吉『白髪の唄』 316
- 第十三章 孤絶と矜持——増田みず子『空から来るもの』 320
- 第十四章 現代的な「供犠」の物語——辻原登『森林書』 322
- 第十五章 人間存在の悲と苦への共感——大原富枝『吉野川』 324
- 第十六章 不遇や不運を引き寄せずにいない資質——南木佳士『家族』 326

- 第十七章 広漠とした死の風景——古屋健三『内向の世代』論 330
- 第十八章 存在に穿たれた果てしのない空虚——牟礼慶子『鮎川信夫』 334
- 第十九章 「内面」と「風景」の円環する構図——内田隆三『社会記 序』 338
- 第二十章 〈ひとり〉の徹底化と〈複数化〉——北川透『詩的90年代の彼方へ』 344

第五部

共苦と互恵への道——書評II

- 第一章 世界のざわめきの向こうに射しこむ恩寵の光——北川透『中原中也論集成』 350
- 第二章 革命的ユートピアニズムと複岐する実存——笠井潔『例外社会』 354
- 第三章 監視社会化と再生するコラボレーション——笠井潔・他『サブカルチャー戦争』 358
- 第四章 公共性論議の新たな展開——宗近真一郎『ポエティカ／エコノミカ』 362
- 第五章 災厄についての先駆的意識——稲川方人・瀬尾育生『詩的問伐』 366
- 第六章 多数性があるべきすがたで顕現した純粹性——瀬尾育生『純粹言語論』 370
- 第七章 ^{コンパッション}共苦と^{ジャスティス}互恵への道——ホセ・A・マリーナ・谷口伊兵衛訳『知能礼賛』 376
- 第八章 終末論的時間と未生時代の記憶——田中和生・他『吉本隆明論集』 380
- 第九章 「大衆の原像」のもつ無限性——田中和生『吉本隆明』 382
- 第十章 希望なき人々に差し出された希望の詩法——阿部嘉昭『換喩詩学』 386

- 第十一章 世界戦争の記憶と言語の本質——藤井貞和『文法的詩学』 402
- 第十二章 非業の死を遂げた者への鎮魂の思い——森川雅美『山越』 406
- 第十三章 他界の海底の怖るべきしずけさ——吉増剛造『裸のメモ』 410
- 第十四章 存在の不全と幻視の力——夏石番矢『ブラックカード』 414
- 第十五章 世界に遍在する「呪い」を白日の下にさらす言葉——小林増堦『でらしね』 418
- 第十六章 無条件の倫理へ——渡辺めぐみ『ルオーのキリストの涙まで』 422
- 第十七章 「おぐらきもの」をたずねる遊歩人^{フラヌール}の歩み——室井光広『柳田国男の話』 426
- 第十八章 啓蒙の力がはらむ復讐の暴力——細見和之『フランクフルト学派』 430
- 第十九章 単一民族、単一言語国家観の陥穽——岡本雅享『民族の創出』 434
- 第二十章 内乱状態がうみだす太平というイデオロギー——兵藤裕己校注『太平記』 440
- 第二十一章 「加担」ということの問いかけ——山城むつみ『小林秀雄とその戦争の時』 444
- 第二十二章 いたたまれなさの淵から——安藤元雄『カドミウム・グリーン』 448

第六部 サクリファイス——随想

- 第一章 枯れかかった一本の木 454
- 第二章 不安の兵器工場 468

索引	519
参考文献	514
初出一覧	509
あとがき	

第三章	
第四章	
密林の虎と 荒野の黒狐	
追放と監禁	494
	482